

古代への招待状

埋もれていた遺産

19

現代の生活になくてはならないものの一つに糸があります。化学繊維や植物繊維など素材も豊富で、衣服・夕

つて糸を作り、どんな製品があったのでしょうか。

奈良から平安時代の遺跡を発掘すると、糸作りに関連した道具も時々発見されます。芋引鉄(おびきがね・おびきかなぐ)と紡錘車(ぼうすいしゃ)です。芋引鉄は「コ」の字形の鉄製刃部に木製の持ち手が付いており、皮の中の繊維を取り出すのに用いたと考えられています。紡錘車は、繊維によりをかけて糸を紡ぐ道具で、中央に穴の開いた円盤状の紡輪(ぼうりん)と、それを差し込んで糸を巻く軸部の紡莖(ぼうけ

オル・袋などさまざまな製品が作られています。では、8-12世紀ごろの奈良から平安時代にどんな道具を使

当時は主に麻(大麻・苧麻)からむし

布は信濃の国の特産

官人の衣服にも用いる

布を生産していたと考えられています。これらの道具は長野市内でも、松代町の松原遺跡や篠ノ井東福寺の南宮遺跡、若穂綿内の榎田遺跡・高野遺跡などで出土しています。

前科郷(さきしなのごう)などの地名が記された布が今でも残されており、信濃国より麻布が租税として納められたことがよく知られています。また、平安時代になると「延喜式



上の2本は紡錘車、下の2本は芋引鉄(県立歴史館所蔵)

布については、もう一つ注意したい点があります。それは信濃の国の特産物であったという事です。

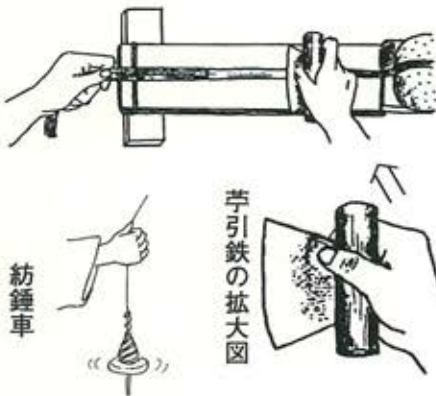
奈良の東大寺にある正倉院の御物の中には、筑摩郡山家郷(やまへのごう)や安曇郡

(えんぎしき)という律令の施行細則が記された史料の中に「太政官ならびに出納諸司の季祿の布は、信濃布をあたえる」という規定があり、官人の衣服の材料として「信濃布」を支給することが記され

るなど、「信濃布」が都で普及していたことも明らかになっています。このほか「和名類聚

は、いずれも麻績郷(おみのごう)が存在したとあります。これも麻などの栽培や生産に何らかの関連があっ

芋引鉄を使った麻かきの図(県立厚狭高校地歴クラブ「やまかい」30号より引用)拡大図とも



うしゅう)という史料には信濃国の各郡の中にどのような郷が存在したかが記されており、伊那郡と更級郡に

- ◇筑摩郡山家郷 現在の松本市の山辺一帯
- ◇安曇郡前科郷 現在の池田町付近
- ◇更級郡麻績郷 現在の東筑摩郡本城村より北の筑北盆地

て付けられた郷名かも知れません。芋引鉄や紡錘車は多くの遺跡で出土しており、決して珍しい資料ではありませんが、正倉院に残された実際の布や、文献に残る「信濃布」の記述などと合わせてみれば、奈良から平安時代の信濃国における生産の一端を推測させる興味深い資料といえるでしょう。

(参考文献) 長野県編「長野県史通史編 第一巻原始・古代」1989年
廣田和穂・栗埋蔵文化財センター調査研究員

道具・芋引鉄と紡錘車